

第1A 分科会『教育課程に関する課題』

(報告者)出雲市教頭会所属

1 発表の概要

(1) 9か年を通した「学習者主体の学び」を具現化する教育課程を目指して ～ビジョンの共有と連携・協働の推進役としての教頭の関わり方～ 鹿児島県鹿児島市吉田地区教頭会

①研究のねらい

学習者主体の学びの目的を明らかにし、吉田地区の教員で共有する。また、学習者主体の学びに対するビジョンの共有と連携・協働の推進に向けた教頭の役割を明らかにする。さらに、9か年を通した学習者主体の学びを具現化する教育課程を評価・改善するための、マネジメントサイクルを確立する。

②研究の概要

本研究は4期に分けて構想しており、今回は、第1・2期の取組についての発表があった。

第1期では、学習者主体の学びの目的や意義を教頭間で共有したり、本研究における教頭の役割について検討したりした。また、学校間の連携を図るための環境整備として、Teams のグループを立ち上げ、各学校の実践に関する情報を共有したりリモート分科会を実施したりした。

第2期では、小学校間の合同研修会を実施したり ScTN 質問紙を活用して学習者主体の学びの評価と授業改善をしたりした。

③成果と課題

学校間の日常的な情報共有を可能とする環境整備の推進や、合同研修会の位置付けによる学校間の共同研究体制の構築や ScTN 質問紙の共通実践ができた。

(2) 教育課程の工夫改善と教頭としての役割 ～コロナ禍を超えて持続可能な教育課程へ～

①研究のねらい

コロナ禍で工夫された取組を見直し、成果のあった取組を分析するとともに、学習指導要領が求める「社会に開かれた教育課程」や「カリキュラム・マネジメント」などを実現しながら、持続可能な教育課程の編成に向けてどのような工夫改善ができるかを考察し、そこに関わる副校長・教頭としての役割について明らかにしていく。

②研究の概要

1年次はアンケート等を利用した課題の整理を行い、2年次は課題解決のための方策の実施および副校長・教頭の役割を検討する。そして3年次は、課題解決に向けた取組の実践および副校長・教頭としての役割や方策の提言を行う。今研究大会では主に「社会に開かれた教育課程の実現」に向けて「地域とのつながりに」に果たす副校長・教頭の役割についての発表となった。

③成果と課題

持続可能な教育課程の編成にあたり、カリキュラム・マネジメントの視点に立って、学校の教育目標や目指す生徒像などを、教職員や保護者、地域住民と見直したり目標達成に必要な教科等横断的な視点や地域人材の活用といった点から内容や方法を検討したりする必要があることが認識された。

第1 A分科会「教育課程に関する課題」

(報告者) 出雲市教頭会所属

1 「小中連携を図りながら、授業改善を進めるための副校長・教頭の役割」

9か年を通した「学習者主体の学び」を具現化する教育課程を目指して
ービジョンの共有と連携・協働の推進者としての教頭の関わり方ー

発表者 鹿児島県鹿児島市吉田地区教頭会

(1) 研究のねらい

- ① 学習者主体の学びの目的を明らかにし、教員が共有する。
- ② 学習者主体の学びに向けたビジョンの共有と連携・協働の推進に向けた教頭の役割を明らかにする。
- ③ 9か年を通した学習者主体の学びを具現化する教育課程を評価・改善するためのマネジメントサイクルを確立する。

(2) 研究の概要

- ① Teams を活用した連携・協働体制の確立に向けた環境整備
(ア) 各学校の実践に関する情報共有 (エ) リモート研究授業の実施
(イ) 連携研修の運営に関する情報提供 (オ) 授業実践動画の共有と活用
(ウ) リモート分科会の実施
- ② 学習者主体の学びに関する提案
(ア) 参観の視点の協議 (エ) 参観者の評価集約と周知
(イ) 参観の視点をまとめた資料作成 (オ) 連携研修推進委員会における改善策の提案
(ウ) 教員への周知
- ③ 合同授業研究会と連携研修 →学校間の共同研究体制の構築
- ④ 「ScTN質問紙」による学習者主体の学びの評価 →データに基づく授業改善の推進

(3) 協議・指導助言から

日常的な情報の共有が実現して研究体制が整備され、授業改善が進められた。その中で教頭として、教職員の行動や考え方を価値づけて関わり、評価して示すことが大切。

2 「社会に開かれた教育課程の実現に向けての副校長・教頭の役割」

教育課程の工夫改善と教頭としての役割 ーコロナ禍を超えて持続可能な教育課程へー

発表者 栃木県宇河地区中学校副校長・教頭会

(1) 研究のねらい

- ① コロナ禍で工夫改善された取組を見直し、成果のあった取組を分析する。
- ② 「社会に開かれた教育課程」や「カリキュラム・マネジメント」などを実現しながら、持続可能な教育課程の編成に向けどのような工夫改善ができるか考察する。
- ③ そこに関わる副校長・教頭の役割について明らかにする。

(2) 研究の概要

- ① 持続可能な教育課程の実現に向けた各校の方策及び成果・課題
(ア) 地域でのボランティア活動を学級活動に絡めて実施。
(イ) 総合的な学習の時間に地域の伝統や歴史に関して学ぶ行事を位置づける。
→準備や片付けまで勤務時間内の実施を可能にする。
「郷土とのつながり」を全生徒が体験し、郷土愛の醸成に効果。
地域のつながりを重視する中での小学校との連携により中1ギャップの解消。
△既存行事と地域行事との兼ね合い、開催時期の調整、活動の場の確保が難しい。
→教職員全体での目的の共通理解。効果の検証。保護者・地域住民との協働。
- ② 持続可能な教育課程を編成する上での副校長・教頭の役割
(ア) 進捗情報の分析と教職員との対話を重ねて課題を把握し意見具申。
(イ) OJTやチームで校務分掌を担わせるセンター制を活かした人材育成。
(ウ) 地域に関する行事を教育課程に位置づけるカリキュラム・マネジメント。
(エ) 働きやすい職場環境や心理的安全を確保するアセスメント・ファシリテーション能力。

(3) 協議・指導助言から

学校の伝統や郷土愛を尊重しながらも社会構造の変化や学校のビジョンを明らかにして、見直しとそれに対する理解、共に推進する体制を作っていくことが重要である。

第1A分科会「教育課程に関する課題」

(報告者) 大田市教頭会所属

1 【9か年を通した「学習者主体の学び」を具現化する教育課程を目指してービジョンの共有と連携・協働の推進役としての教頭の関わり方ー】

○発表の概要

「VUCAの時代」と言われる昨今、自ら考え、判断し、積極的に対応する子供の育成が求められている。その中で学校によって学習指導に対する教員のビジョンが同一でなかったり、授業における教員の関わり方に学校差が見られていたりしている現状がある。そこで各学校と協働し、9か年を通した学習者主体の学びを具現化する教育課程の実現について推進役としての教頭の役割について追究した。

この取り組みは4期に分けて構想しており、第1期は、学習者主体の学びに向けて調査と環境整備を行った。その中で日常的に連携がとれるよう、教頭を所有者としたTeamsグループを立ち上げ、各学校の実践などを情報共有したり、リモートで分科会を行ったりした。第2期では、小学校間の合同研修会を行った。教頭としては、連絡調整を行ったり参観における資料作成を行ったりした。このことにより、学校間の日常的な情報共有を行うことができ、共同での研究体制を構築することができた。

○協議

ブレイクアウトルームでは、小中連携をどのように図っているか協議を行った。その中では、定例の教頭会の中で校区の小中学校で情報交換を行っていたり、授業において研修会を積極的に設けていたりするなどの声があった。また、年に3回保幼小中の交流会を行っている学校もあった。指導助言の中では、連携する上で目指す子ども像について教頭どうして話し合ったり、大きな柱をしっかりと考えていたりすることが大切だとお話いただいた。

2 【教育課程の工夫改善と教頭としての役割ーコロナ禍を超えて持続可能な教育課程へー】

○発表の概要

新型コロナウイルス感染症の対応に迫られた過去4年間は、教育課程を大幅に改定されることになると同時に、国ではGIGAスクール構想が前倒しで導入されることとなった。本研究では、改めてコロナ禍で工夫改善された取組を見直し、成果のあった取組を分析するとともに持続可能な教育課程の編成に向け、どのような工夫改善ができるか考察し、副校長・教頭としての役割について考えていった。本地区の研究では、まず、持続可能な教育課程を編成するにあたり、「地域に関する行事」をどのように教育課程に位置付けているか各校にアンケートをとったりした。その中で、休日に実施していた活動を学級活動や総合的な学習の時間に位置付けることで勤務時間内の実施が可能となったなどという意見を共有することができた。また、それを実現するためには、教職員と対話を重ねながら、効果的な教育活動になるように副校長・教頭のリーダーシップ、マネジメント力、コーディネート力、コミュニケーション力を高めていくことが求められる。

○協議

協議では、社会に開かれた教育課程の編成について話し合った。その中で多く出た意見としては、学校運営協議会を有効に活用するということがあった。積極的に地域からボランティアを募集し関わってもらうことで、子どもたちに郷土愛が生まれ、自己肯定感が高まってくるという声があった。指導助言では、同時にタイムマネジメント・リスクマネジメントなどの働き方改革の推進にも努めることが大切だというお話もいただいた。

第1B 分科会「教育課程に関する課題」

(報告者) 松江市教頭会所属

校種間連携から考える教育課程—札幌市の特色を生かした校種間連携による教育課程の工夫—

1 発表の概要

(1) 研究のねらい

札幌らしい特色ある学校教育と学校教育の今日的課題や教職員の授業力・指導力の向上、安全・安心な学校づくり、家庭や地域と連携した信頼される学校の創造にも取り組み、「自立した札幌人」の育成を目指している。3C（継続性、協働性、関与性）の視点を大切にしつつ、各校種間での教育課程の編成を円滑に進めるための手立てを探る。

(2) 研究の概要

①小学校と幼稚園・保育園との連携

総合的な学習の時間のキャリア教育として教育課程に位置付け、小学生が園児に対して、学校案内、授業体験等を行い、小1プロブレムの解消につなげている。

②小学校と中学校との連携

「授業について」「運営について」「討議について」「記録（広報）について」の四つの部門に分かれて協議を重ねた。

③小学校と高等学校との連携

同じ地域でボランティア活動に取り組むことで、お互いを尊重し、協力することの大切さに気付いたり、自らの意志で身の回りの環境をきれいにする意識を高めたりする機会となっている。

④小学校と特別支援学校との連携

特別支援学校の児童との交流を通して、お互いの友好を深めるとともに、他を思いやる心を育てている。

(4) 研究の成果と今後の課題

①校種間連携から見えた成果

児童生徒の「学び」や「育ち」を切り口に、地域で目指す子供像の共有が図られた。

②3Cの視点から

「教頭の関与性」については、教頭が目的を相手に明確に伝えることで、その後の実務担当者による具体的な話合いが充実したものになる。

③今後の課題

校種間連携を持続可能な取組にするためには、活動を通して何を学ぶのかをしっかりと吟味し、活動の精選をしていく必要がある。

2 協議の柱

【地域の資源や人財を生かした校種間連携を進め、社会に開かれた教育課程を編成するための副校長・教頭の役割や関わり方】

- ・共通のビジョンで子どもたちの育ちを考えている。教育課程にどう位置付けるかが課題。教務との連携を密に行っている。
- ・教頭として組織的なマネジメントを行ったり、教育委員会との連携を調整したりしている。継続していくための教頭の役割は大きい。

3 所感

地域や校種は違うが、それぞれが目指す子どもの姿をもちながら校種間連携に取り組んでいることが分かった。共通する課題として、教育課程にどのように位置づけるのか、継続するためにどのような手立てが必要なのかなど、これからの連携の在り方を考える機会となった。

第1B 分科会「教育課程に関する課題」②

(報告者) 松江市教頭会所属

学校教育目標の実現を目指した教育課程の実践を推進する学校運営の在り方―「鍛え、磨き、育む」資質能力の育成を通して―

1 発表の概要

(1) 研究のねらい

学校教育目標の実現に向けた教頭としての業務遂行の在り方を究明する。

(2) 研究の概要

①研究主題に迫るための方向性の共有化を推進するための教頭の役割

学校教育目標の達成に向け、学習活動や特別活動で「鍛え、磨き、育む力」をどのように関連付けて指導するかを明確にした。学校行事では、生徒が自分の役割を果たせるように、活動時間の確保や生徒のアイデアを反映させる仕組みを導入した。学級経営においては、学級ごとの環境整備を支援した。人材育成と学校としての組織力を高めるために、課題研究主任に加えて研修主任を配置し、多角的な視点で研修をすることで、より深い実践を行えるようにした。

②授業改善を通じた資質能力を高めるための学校運営の充実における教頭の役割

授業改善を進めるため、単元構想の段階から「習得」と「活用」のバランスをとるように指導した。各教科の授業で「鍛え、磨き、育む力」を意識した指導案を作成し、学校全体で一貫した指導を行った。キャリア教育や職場体験学習を通じて、生徒が将来の生き方や適性について考える機会を提供した。

③生徒の資質能力を高めるための教頭の役割

年度始めに「身に付けさせたい資質・能力」や「振り返りの視点」を提示し、自己評価の重要性を伝え、生徒が自分自身の成長を振り返り、次のステップに進むための支援を行った。ICTを活用した意識調査を年間3回実施し、学校や学級の状況を分析して個票を作成した。

これらの取組を通じて、学校全体の方針に基づき、教職員と協力しながら、学校運営の改善に取り組んだ。

(3) 研究の成果と今後の課題

①成果

- ・学習活動や特別活動で「鍛え、磨き、育む力」を意識的に関連づけることで、生徒の意欲的な取り組みが促進された。
- ・授業改善において、「習得」と「活用」のバランスを取ることで、生徒は知識を深めるだけでなく、実社会での活用方法を考える機会が増えた。

②課題

- ・教育課程と学校教育目標との連動をより明確にし、年間指導計画を作成する必要がある。
- ・生徒一人一人の資質・能力の向上を継続的に支援する体制の強化が求められる。

2 協議の柱

【学校教育目標の実現に向けて児童生徒の資質能力を高め、魅力ある学校づくりを推進するための副校長・教頭の役割と関わり方】

- ・今後、教育課程特例校制度・授業時数特例校制度を利用して、探求学習として40時間実施する予定。
- ・キャリアシートを活用して、市の50年後を考え課題をどう解決していくか考える授業を展開している。そのため、これまで行っていた職場体験学習をやめた。

3 所感

教頭として、目指すビジョンをわかりやすい言葉で明確に表し、具体的に実践するための道筋を明らかにすることが大切だと感じた。そのため積極的な授業改善に取り組み、教員が「教える」から生徒が「学ぶ」といった主体的に学習に取り組む環境を整備する必要がある。また、協議の中で出た先進的な取り組みの話を聞き、自校でも取り組んでみたいと感じた。

第1B分科会「教育課程に関する課題」

(報告者) 出雲市教頭会所属

1 発表の概要

(1) 校種間連携から考える教育課程

～札幌市の特色を生かした校種間連携による教育課程の工夫～北海道札幌市立資生館小学校

<研究のねらい>

本研究は3C（継続性、協働性、関与性）の視点を大切にしつつ、市内各校で実践されている校種間連携を比較分析することを通して、校種間での教育課程の編成を円滑に進めるための手立てを探る。そして、幅広い校種間における連携の実践から、その成果と課題を明らかにすることをねらいとした。

<概要>

札幌市内195校中174校の小学校が幼稚園・保育園と連携している。中には総合的な学習の時間に位置づけ、5歳児と小5のふれあい活動（学校案内や授業体験）を行い、小1プロブレムの解消につなげている学校がある。小学校と中学校の連携については札幌市教育研究推進事業として全ての学校で授業公開等の活動に取り組んでいる。小学校と高等学校の連携については約5%の学校で行っている。公園の落ち葉やゴミ拾いの活動を小、中、高で協働作業をしている例がある。地域でめざす子ども像を共有したことが大きな成果につながった。

(2) 学校教育目標の実現を目指した教育課程の実践を推進する学校運営のあり方 ～「鍛え、磨き、育む」資質能力の育成を通して～

茨城県 常陸太田市立太田中学校

<研究のねらい>

本研究では、学校教育目標の実現に向けた教頭としての業務遂行のあり方を究明する。

<概要>

学校教育目標の達成に向けた一貫した指導方針を全教職員に伝え、共通の教育活動を展開するようサポートした。「やってみて考えさせること」を学校運営の根底に置いた。また、各教科の授業で「鍛え、磨き、育む力」を意識した指導を学校全体で一貫して行った。その他、様々な取組を行った。成果としては生徒の意欲的な取組が促進された。

2 研究協議及び質疑

グループに分かれ司会者を中心に協議をした。(1)の発表については「地域人材を生かした社会に開かれた教育課程のあり方」についてグループ内で協議した。(2)の発表については「教育目標と教育課程の連動」についてグループ内で協議した。グループ協議の後、指導助言者からの指導があった。協議についてはそれぞれの学校の状況をもとに、深まりのある協議となった。グループの全ての学校で「児童生徒数の減少傾向が見られ、できることが限られること」「教職員の負担が増し吟味した教育活動を行う必要があること」が共通の課題であった。児童の自己肯定感が低く困っている学校も多かった。

3 まとめ

発表、協議共に深まりがあった。同じ教頭という立場の中で、どのような関わりをしていくのか参考になった。より効果的な取組を模索し、実践していく意欲が高まった。

第 1B 分科会報告「教育課程に関する課題」

(報告者)飯石郡教頭会所属

1 校種間連携から考える教育課程

—札幌市の特色を生かした校種間連携による教育課程の工夫—

北海道札幌市立資生館小学校 教頭 斎藤 健一

○発表の概要

札幌市は、小学校と幼稚園・保育所、小学校と中学校、小学校と高等学校、小学校と特別支援学校との校種間連携を行っていた。連携の際には Win-Win の関係を大切にし、お互いにメリットのある連携づくりが行われていた。

- ・ 中学校との連携…札幌市教育研究推進事業」という共同研究の仕組みを活用
- ・ 高等学校との連携…高校生とのボランティア活動、高校生による読み聞かせ等
- ・ 特別支援学校との連携…お互いの友好を深めるとともに、他を思いやる心をはぐくむ。

○意見交換（報告）

- ・ 連携校同士の Win-Win の関係の必要性が分かった。
- ・ 交流は行っているが、活動が形骸化してしまっているところがある。子どものためになっているかという視点で検証していくことが必要で、その際の教頭の役割について考えていきたい。
- ・ 小中連携を年間計画に位置付けたことで、中学校での不登校生徒がいなくなった。

2 学校教育目標の実現を目指した教育課程の実践を推進する学校運営の在り方

—「鍛え、磨き、育む」資質能力の育成を通して—

茨城県常陸太田市太田中学校 教頭 渋谷 恭子

○発表の概要

教育課程の確実な実施に向けて、教頭がどのように学校運営をリードし、教育活動と連動させるかを明確にすることを目的としていた。その際、以下の 3 点について実践例を交えながらの発表だった。

- ・ 研究主題に迫るための方向性の共有化を推進するための教頭の役割
- ・ 授業改善を通じた資質能力の育成を高めるための学校運営の充実における教頭の役割
- ・ 生徒の資質能力を高めるための教頭の役割

○意見交換（報告）

- ・ 直接体験は魅力ある学校づくりにつながる。そのためにも、外部とのつながりが必要であり、教頭の役割は大きい。学校紹介やフリー公開等を行い、学校を知ってもらうことで外部とのつながりは深まるのではないかな。
- ・ 子どもの資質能力の向上のためには、現状把握が大切。現状把握によりつかんだ課題の解決のために組織をどうするかのマネジメント力、具体的に進めていくためのファシリテーション力が必要ではないかな。